

センチメンタル ジャーニー (Ⅲ)

——フランスとイタリーを巡るヨーリック師の旅——

ローレンス スターン作

小林 亨 訳

アマアン

この言葉がわたしの口から出たとたんに妹御を乗せたL…伯爵の駅馬車がさっと駆け抜けて行った。彼女は瞬間をとらえてわたしにちょっと会釈をしたが——それは一種特別のものだったので、わたしはまだ彼女と縁が切れてないことが分った。そしてやはり、彼女はその表情通り誠実であった。というのは、わたしがまだ夕食を終えてしまわないうちに、彼女の兄の召使が彼女からの短かい手紙を持ってわたしの部屋を訪れたからである。その手紙の中で、彼女は、甚だ失礼ながら一通の手紙をお托しいたしますので、パリでお暇が出来ましたらその日の午前中にR…夫人に直接お手渡し願いたい、と言ってきた。その手紙には、ただ次のようなことがつけ加えてあった。申し訳なく存じておりますが、どうした「心の動き」^{パンチャン}のためか、貴方様にはわたくしの身の上についてお話し申し上げ兼ねました——その事がまだ心残りに残じます。それ故もし貴方様がいつの日かブラッセルをお通り遊ばし、その時なおL…夫人の名をお忘れになりませんでしたら、わたくしは喜んでその責務を全ういたしたく存じております。

うるわしの人よ！それではブラッセルでお会いします、とわたしは心の中で叫んだ——それはイタリーからの帰り道、フランドル経由でドイツからオランダへ抜ける途中にすぎないんだ——廻り道になってもせいぜい十の宿場を数えるにすぎない。それにたとえ一万の宿場があったとしても、このような憂いを秘めた人の語る、心をうつ悲しい物語に心を動かされる機会が与えられれば、

どんなに心の喜びがわたしの旅を飾ることになるだろうか？彼女が涙を流すのを見るなんて！そうしてわたしに彼女の涙の泉を乾かす力はなくとも、それでも一夜夜もすがる彼女の傍にハンカチを手にとりただ黙って坐り、この類いのない美しさを持つ女性の頬をつたう涙を拭いたら、言い知れぬ激しい感動を覚えることだろう。

この考えには何もやましいものはなかったが、それでいてわたしは直ちにこういうことを想った自分の心を、最も強く激しい非難の言葉でとがめたのであった。

読者の皆様にはすでに述べたように、生涯のほとんど一刻といえども誰かに激しく恋していることが、わたしにおける独自の幸せの一つなのである。そしてわたしのこの前の恋の炎は、たまたま何かの拍子で、突然嫉妬という一陣の風に吹き消されてしまったのだが、ほんの三ヶ月ばかり前、エライザという女性の清純なる火でまた新たに恋の炎を燃やしたのであった——しかもこの旅行の間その炎がわたしの胸に燃え続けることを正に誓ったのであった——だからわたしはどうしてその事に知らぬふりが出来ようか？わたしはエライザに永遠に変らぬ愛の誓をたてたのであり——彼女はわたしの心すべてをわがものとする権利がある——それにわたしの愛情を分かつことは愛情を少くすることであり——それを表にあらわすことは、それを危険にさらすことなのであり——危険のある所では愛が消えることもあり得るのである——だからヨリックよ！これほどに確信と信頼に満ち——これほど善良で優しく、しかも非の打ちどころのないエライザの心に匹敵するものを——お前はどこで見つけようというのか？

——ブラッセルへは行かないぞ、とわたしは内なる声をさえぎって答えた——けれどもわたしの想像力はそのまま進んでいって——わたしとエライザとの別れの時、どちらもさようならと言う力さえもなかったあの時のエライザの表情を思い出した！そして彼女が黒いリボンをつけてわたしの首にかけてくれた彼女の肖像画を眺めたが——そうすると顔の赤らむのを覚えた——この絵に正々堂々と接吻出来たらなんでもするんだがと思っても——恥かしさがついたので——そこでその絵を両手ににぎりしめてわたしは言った——この優しく弱い花

を根元まで傷めていいものか——しかもヨリック！自分の胸でそれを守ると約束したお前がそれを傷めていいものか？

なのかわたしは地面に膝まづいて言った。幸福の永遠につきない泉よ！——あなたが証言者になって下さい——またその泉の水を味わう清純な心も証言者になって下さい、そしてわたしがエライザと一緒になければ、たとえ道が天国へ至るものであろうと、ブラッセルへは行かないことを証言する者になって下さい。

人間の心というものは、このような心からの喜びの際には、理性をないがしろにして何時もおしゃべりに度をすごすものである。

手紙

アミアン

運命の女神はラフルールにまだほほえみかけていなかった——というのは、彼はまだ彼の騎士道の手柄をたてていなかったからで、すでに24時間近くも経っているが、彼がわたしに仕えて以来まだひとつとして彼の御奉公の熱意を示す事件がおきていなかったのである。この哀れな男はどうにも我慢が出来なくなっていた。するとL…伯爵の従僕が手紙を持ってやって来て、これが始めて実地に腕をためす機会となったので、ラフルールはこの機を逃さずその男の主人に敬意を表すために宿屋の奥の部屋に彼を連れていき、ピカルディ産の飛びきり上等の葡萄酒を一二杯御馳走した。そこでL…伯爵の従僕はそのお返しに、またラフルールに礼儀の点でもおくれをとらないように、彼を伯爵の宿へと連れていった。ラフルールの「親切」は（彼の顔そのものがパスポートになっているので）すぐに台所にいた召使達全部を彼と親しくさせてしまった。そしてフランス人は、才能がどんなものであれそれを示すのには遠慮をしないので、ラフルールは五分とたたないうちに、彼の横笛をとり出してはじめての一曲を吹きながら自分でダンスの先頭に立って、小間使、^{フィエド}シャンプル、^{メートル}ドテル、^{ドテル}宿の主人、調理人、女中、それに犬、猫、さらにおいぼれ猿まで、家中の者をダンスに誘い出した。ノアの洪水以来、こんな楽しい所はなかったであろう。

L…夫人は、兄の部屋から自分の部屋へ行く途中、階下のたいへんなバカ騒

ぎを聞きつけて、なんのことだろうと彼女の「小^{フィユド シャンブル}間使」を呼びりんで呼んで訊ねた。横笛を吹いて家中を楽しくしていた者が、例の英国の紳士の従僕であることを聞くと、彼女はその男を自分の部屋に上げるようにと言いつけた。

ラフルールは手ぶらで何うことも出来なかったので、階段を登りながら彼の主人からのL…夫人に対する挨拶をしこたま用意し——さらにL…夫人の御機嫌を伺う長広告をつけ加えて申し上げたのである——わたくしどもの主人は、奥様が旅のお疲れから一刻も早く御回復遊ばすよう「心^{オゼデス ポアール}を傷めております」——そして言葉の結びに、主人は奥様のお書きになりましたお手紙を頂戴いたしました——L…夫人はラフルールをさえぎって言った。それではわたくしに御返事を下さったのですね。

L…夫人は、すっかり独り合点している調子でこの言葉を述べたので、ラフルールは彼女の期待に背く勇氣はなかったし——わたしの名与を非常に気づかっていたし——さらに「婦人^{アンネガール ヴィザ ヴィ デコヌフェム}に対する敬意」に欠けているような主人に仕えていることの出来る人物とみられては、彼の名与にも甚だ無関心ではいられなかったろう。そこでL…夫人が手紙を持参したかとラフルールに訊ねた時、彼は「勿論^{オ クワイ}のことでご座います」と言って、帽子を床に置くと左手で右ポケットのふたを押え、右手で手紙を探し始めた——それから今度は逆をやってみて——「畜生^{ディアブル}！」と呟き——それから全部のポケットをさぐり——順々にポケットというポケットをさぐり、時計入れの小さなポケットまで忘れずに探し——「くそ^{ベスト}ったれ！」と言い——それからポケットの中のものを床にぶちまけ——汚ない襟飾りを引っぱり出し——次にハンカチ——くし——鞭ひも——寝^{ナイト}帽^{キャップ}を取り出し——それから帽子の中をのぞいたが——これほどんだ「へま^{ケル エチユルデリ}をしたものです！」宿屋の机の上におき忘れてきてしまいました——ひと走りして取って参ります、ものの三分とかかりませんから、と言った。

わたしが丁度夕食を食べ終った時、ラフルールはこの出来事のあらましを話そうと入って来た。彼は一部始終をありのまま簡単に物語って、もし貴方様が夫人に御返事をするのをお忘れ（パルアザール）になったのでしたら、その「手^{フォーバ}落ち」を挽回出来るよう手筈をととのえておきましたし——もしそうでなかったらそのままにしておけばよろしいわけでした、とつけ加えて言った。

さてわたしは返事を書くべきだったかどうか、自分の「^{エチケツト}礼法」には全く自信がなかったが——たとえ書いたにしても、悪魔だって怒るわけにはいかないだろう。というのは善意の男が、わたしのためにしようとする職務への忠実な熱情から出たものであって、どんなに彼が道を間違えたとしても——また、そんなことをしてどんなにわたしに迷惑をかけたとしても——彼の心にはなんの罪もないし——わたしはなにもどうしても書かなければならないという訳ではなかったし——そして何より肝心なことは——彼は自分でへまをやったような顔をしていなかったことである。

——それはうまくやってくれた、ラフルール、とわたしは言ったが——それだけで充分であった。ラフルールは稲妻のように部屋から飛び出して行くと、手にペンとインクと紙を持って帰って来た。机の所に寄って来ると、顔に非常な喜びの表情をみせてそれらの品々をわたしの前においたので、わたしはそのペンを取り上げないわけにはいかなかった。

わたしは書き始めてはやめ、それからまた書き始めたのだが、別に何も言うことはなし、どうでもいいことを書けば六行位にはなったかも知れないが、六通りもの違った書き出しをしても、まったく満足のいくものはなかった。

要するに、わたしはまったく書く気分になれなかったのである。

ラフルールは部屋から出て行くと、インクを薄めるためにコップに水をすこし入れて持って来て——それから吸取砂と封蠟とを持って来たが——やはり書けないことには変わりはなかった。わたしは書いて、それから消し、それから破り捨て、それから燃やし、それからまた書き始めたが——「^{ル ディアープル ランボルト}畜生どうしたって書けやしない！」と半ば独り言を言った——こういう手紙は書けやしない、そう言うなりやけ気味にペンを放り投げた。

わたしがペンを投げ捨てると、すぐラフルールは非常にうやうやしい態度で机の傍に近よって来て、まことに恐縮なのですがと百万べんも言訳をしてから、次のように言った。実は同じ聯隊の鼓手が伍長のかみさんに宛てて書いた恋文を一通、丁度ポケットに持っているのですが、この場合にお役に立ちませんか。

わたしは、この愛すべき男に気ままにやらせてみようと思ったので——それ

ぢやその手紙を見せてくれ、と言った。

ラフルールは、短かい手紙や恋文^{ビレドワ}をくしゃくしゃにして一杯つめ込んだ小さな汚ない紙入れをすぐに取り出すと、それを机の上において、それからその手紙類をたばねた紐をとき、ひとつひとつ眼を通していき、問題の恋文を探しあて——「これですよ！」^{ラヴオアラ}と言って手を叩いた。それから先づその手紙を開いてわたしの前におき、そしてわたしが読む間机から三步しりぞいて立っていた。

手紙¹⁾

奥様

伍長殿が不意にお帰りになり今晚の逢う瀬は相かなわぬこととなり申し、小生はまことに深い哀しみに沈み、同時に絶望にひんしております。

しかし恋の喜びよ永遠なれ！小生には貴女様のことを想うことが喜びなのであります。

恋は愛のなさけがなくてはむなしいものであります。

愛のなさけは愛がなくてはなおのことむなしいものであります。

私達二人は希望を失ってはいけないと皆が申しております。

伍長殿は水曜日に衛兵につかれる由、皆が申しておりますので、その時こそが小生の出番であります。

それぞれ順番というものがあります。

その間は当分、恋愛万才！恋のたわむれ万才！

胸の底より、最もうやうやしき

しかも優しき心をこめて。

永遠に奥様のものなる

ジャック ロック

伍長という語を伯爵という語にかえて——それに水曜日に衛兵に立つことなどなんにも言わなければ——まづこの手紙は可もなく不可もなしで——それで、わたしの名誉と彼の名誉と、それにこの手紙の名誉のために、傍にふるえ乍ら立っているこの愛すべき男を満足させてやろうと——わたしは手紙の一番良い

所を選んでそれをわたしなりによくかきまぜてから書き上げると——その手紙に封蠟をし、それを彼に持たせてL…夫人のもとにやった——そうして翌朝、わたし達はパリへの旅を続けたのである。

パリ

人が供ぞろいの立派さで勝負をきそい、六人もの供人や料理人二人も従えて肩で風きって進むのなら——パリのような町はうってつけの所で——街のどんな隅々からも馬車で乗り込むことが出来るのである。

騎兵が手薄で歩兵ときたらたった一名にすぎないこの貧乏たらしい衰れた殿様は、戦場から退却して陣屋で空威張りしていた方が良いわけだが、これも、もし上り込めればの話である——「上り込めれば」とことさら言ったのは「^ム皆の者！ ^{メザンファン}参ったぞ」——つまり、さあまかり来したぞ——とどなって、ほかの人がどう思おうとかまわずに、「天下る」ことなどは出来ない相談だからである。

わたしが宿屋の部屋でまったく一人になった時、まず感じたことは、実を言えば前に考えていたような華かなものではなかった。わたしは埃まみれの黒い服のまま、心も重く窓辺に寄ると、ガラス越しに、黄や青や緑の服を着た世間の人達が快樂という標的に向って進んで行く様子を眺めた。——折れた槍を持ち、臉甲のなくなった兜をかぶった老人達も——兜には東洋の鳥の羽を飾り、金のように光る甲冑をつけた若者達も——みんな——その名声と恋を求めて競技に熱狂した中世の騎士達のように、標的に向って進んで行くのを眺めた。——

ああ、衰れヨーロッパよ！お前はここで何をしているんだ？とわたしは叫んだ、華々しい装いの騎士達の一撃でもってお前は粉々になってしまったが——探してみたまえ——なにか曲りくねった露地を探してみたまえ。その入口には回転木戸があって、きらびやかな馬車も入らず、車の前を照らす^{たいまつ}松明の明りも届かない露地ではあるが、そこでお前は、床屋のおかみさんのような「^{グリセット}手に職を持った女性」と楽しい話を交わして心を慰め、そういう人達に仲間入り出来るんだ！——

——そんなことをするんなら、死んだ方がいい！わたしはR…夫人に届けな

くてはならない手紙を取り出して言った——何はともあれ、まづこの婦人の所へ伺うことにしよう。そこでわたしはラフルールを呼んで、直ぐに床屋を見つけて来て——帰って来たら服にブラシをかけるように命じた。

かつら

パリ

床屋はやって来ると、わたしのかつらに手をつけることをがんと拒否し、わたしのかつらが彼の手にあまったのか、手にする程のものでなかったのか、どちらにしても彼は手をつけないので、仕方なく彼が自分ですすめる既製品のかつらを買うことにした。

——しかし君！このかつらの捲毛はすぐ取れそうぢやないか、わたしが言う——海の中へおつけになってもちゃんと付いております、と彼は答えた——

このパリという町では、物事が何んでもなんて大袈裟なんだろう！とわたしは思った——イギリスのかつら職人の頭なら、せいぜい考えても「手桶の水におつけになっても」ぐらいが関の山だろうが——まったく何んという相違なんだ！これは永遠と一刻の違いみたいなものである。

わたしは本当のところあらゆる冷たい概念というものが嫌いであって、また、そういうものを生み出すしみったれた思想も嫌いだから、一般に自然の偉大な作品に非常に感銘を受けるので、わたしとしては、出来ることならすくなくとも「山のような」ぐらいの比喻をしたい。こういう場合にみられるフランス的比喻の壮大さをけなして言えることは、次の事である——壮大華麗さは言葉に多くて実体には少ないということだ。確かに海という比喻は心を巨大な想念で満たすものであるが、しかしパリははるか深く内陸部にあるので、実際にためそうとパリから海へ急いで百哩を歩いて行くことは出来ない相談で——つまり、このパリの床屋の言うことは意味をなさないのである。——

大海と比べてみれば手桶の水は表現の上ではみすばらしくみえるが——しかし言えることは——一つの利点があるということで——手桶の水は隣りの部屋にあるので、捲毛が取れるか取れないかは、簡単にその中につけてためすことが出来るということである。

真実を語れば、そして物事をもっと卒直に考え直しすれば、「フランス式表現法は、物事をその実体以上に誇張するものである。」

国民性というものは、最も重大な国事などよりも、こういった他愛のない「^{コミュニケーション}些事」の中に、正確でしかもはっきりと読みとれるものである、とわたしは思う。そしてそういう国事になると、どこの国のお偉ら方も皆同じように肩をゆすってしやべったり歩いたりするものだが、そんな連中の話にはわたしはまったく関心がないのである。

床屋の手から抜け出すのに非常に時間がかかったので、その晩R…夫人の許に手紙を持って行くにはあまりに遅くなってしまった。とは言うものの、男が一旦外出しようとしてすっかり身仕度をしてしまつては、思いなおすことなど出来やしない。それで、投宿した宿「オテル・ド・モデーヌ」の名前を書きとめると、どこへ行こうと決めないで外出したが——行先は歩きながら考えよう、とわたしは独りごちた。

脈搏

パリ

人生のささやかな嬉しい好意に祝福あれ、お前は人生で人の歩む道を平坦なものにしてくれるのだ！それはまるで一目で愛をはぐくむ優しさと美しさのようなもので、扉を開けて、他人であるわたしを迎え入れてくれるのもお前なのである。

——すみませんが奥さん、オペラ・コミック座へ行くにはどう行けばいいのか、教えてくださいませんか、とわたしは訊ねた。——よろしう御座いますとも、^{ムツシュ}旦那様、と彼女は縫物をわきにのけながら答えた——

こんな風に仕事の邪魔をしてもいやな顔一つしないような人を探して、わたしは六軒ばかりの店を覗いて来たのだが、とうとうこの店が気に入って中に入ったのであった。

彼女は店の右手にある低い椅子に戸口の方を向いて坐り、ひだ縁を縫っているところだった——

——「よろしう御座いますとも」彼女はそう言うと傍の椅子の上に縫物をおき、坐

っていた低い椅子から立ち上がったが、非常にいそいそとした様子と表情を見せたので、彼女にルイ金貨五十枚とられても、わたしはこう言っただろう——
「この女性は親切だなあ。」

彼女は店の戸口のところに出ると、わたしの行く街の方角を指して言った、
且那樣、お曲りになって下さい——且那樣、先づ左手にお曲りになって下さい——
「ただお氣をつけて」——二つ曲り角がありますから、間違わずに二つ目をお曲り下さい——それからもうすこしいらっしゃいますと教会が御座いまして、それを過ぎましたら御面倒でもすぐに右へお曲り下さい、そうすると「新橋」のたもとに出ますので、それをお渡りになれば——それからほどなたでも教えて下さるでしょう——

彼女は三度もくり返し道順を教えてくれたが、三度目の時も最初の時と同じくらい丁寧で親切に辛抱よく教えてくれた——もし「話し方」や「態度」にある意味があるとしたら、そしてそういうものに背を向ける心を持つ人に対してなら別として、確かに意味があると思うのだが——彼女はわたしが道に迷わないように本当に心配してくれたようであった。

その女性はいままで見たこともないような美しい職を持った婦人であると思っただけでも、その美しさのためにわたしが彼女の礼儀正しさを評価したとはわたしは思わない。ただわたしは彼女に大変有難とうと言った時、彼女の眼をじっと見つめて——彼女が道順を教えてくれたように、三度くり返してお礼を述べたのを覚えている。

わたしは戸口からものの十歩と歩かないうちに、彼女の教えてくれたことを全部忘れてしまった——それで振り返ってみると、彼女はわたしが教えられた通りに行くかどうかを確かめるかのように、じっと立っているのが見えたので——わたしはまた戻って最初に曲るのは右か左かを訊ねたが——それはまったく道筋を忘れてしまったからであった。——まあ驚きましたこと、と彼女は半ば笑いながら言った——ほんとなんですよ、男が女性の親切な注意よりもその本人のことを考えている時にはよくあることなんです、とわたしは答えた。

このことは本当に真実であったので——彼女は女性が誰でも理にかなったことを認めた時にするように、腰をかがめてお辞儀をすると、わたしの言った事

を納得したくれた。

——「ちょっとお待ちになって！」彼女はわたしを引きとめようとわたしの腕に手をおいてそう言うと、店の奥から小僧を呼んで手袋の包みを持ってこさせた。丁度そちらの方へ一包み届けさせようと思っていたところなんです、よろしかったら中に入ってちょっとお待ちになって下さいませ、すぐに用意いたしまして、小僧が旦那様をそちらへお連れいたします——そこでわたしは彼女について店の奥の右手に入ったが、腰を下ろしたいという様子をみせて、椅子の上に彼女がおいた髪飾りを手にとると、彼女は自分の低い椅子に腰をかけたので、わたしも待っていましたとばかり彼女のそばに腰をおろした。

——旦那様、すぐに用意をさせますから、彼女が言うのに——わたしは答えて言った、その間にあなたの御親切に対して何か御礼の言葉をぜひ言わせて頂きたいんです。誰でも一時的な親切というものは出来るものですが、親切を続けることは、それが天性の一部であることを示しています。そして付け加えてわたしは言った、もし心臓から出て手足の先まで流れるのが同じ血液でしたら（と、ここでわたしは彼女の手首に触れた）あなたには世間の誰よりも立派な脈がうっていると思います——それじゃ脈をみて下さい、と彼女は腕をさし出して言った。それでわたしは帽子を下におくと、片方の手で彼女の指をにぎり、もう一方の手の人差指と中指で彼女の脈をおさえてみた——

どうだ！親愛なるユージュニアス²⁾よ、君がたまたま通りかかって、わたしが僧服を着てここに坐っているのを見てくれたらいいんだが、しかもわたしは女性の熱がひどく上り下りするのをみているかのように、おつにすまして熱心に一つ一つ彼女の脈を数えているところなんだ——そうしたら君は、どんな風にわたしの新しい商売を笑ってそれを種にお説教を垂れることだろうか？——そして君は笑ってお説教を垂れるべきだったんだ——でもわが愛するユージュニアスよ、きっとわたしはこう言ったろう「この世の中には『女性の脈をみるよりも』もっといかがわしい商売だってあるんだぜ。」——しかしよりによって女店主の脈をみるなんてねえ！君はこう言うだろうよ——しかもヨーリック、まる見えのお店でするなんて！——

——ますますいいじゃないか、ユージュニアス、わたしの気持が正しければ、

世間が寄ってたかってわたしが女性の脈をみてるるところを眺めたって、別にかまうことはないんだよ。

亭主

パリ

わたしが脈を二十かぞえ、さらにどんどんかぞえて四十に近づいた時、彼女の亭主が不意に奥から店に入って来て、わたしの勘定を狂わせた——これが主人ですの、と彼女は言い——それからまたわたしは新たに数え始めた——旦那様は御親切にもわたしの脈をわざわざみて下さっているんです、と亭主がそばを通る時彼女は言った——彼は帽子を取ってわたしに一礼し、申し訳御座いませんです、と言った——それから帽子をかむると外へ出て行った。

こりゃ驚いた、男が出て行くとわたしは独り心に呟いた——この男が本当にこの女性の夫なんだろうか？

なにがこの感慨の原因になったのかよく分っている人達はすくないだろうが、そういう人達には辛抱して頂いて、分っていない人達に説明してみよう。

ロンドンでは、商店主とその妻は一心同体であるように思える。つまり精神と肉体のいくつかの能力については、時には夫がまた時には妻がそういう能力の一つを持っていて、全体として優劣なしとなって、夫婦の理想に近い調和がとれるのである。

パリでは、こんなに違うものはないと言えるほどに夫と妻とで違っている。というのは店の経営権はすべて夫の手になくて、夫はめったに店に出ることがなく——店の奥の暗い陰うつな部屋に、くづ糸で作ったナイト・キャップをかむって、自然が生み出したままの無骨さをまる出しにしてしょんぼり坐っているのである。

専制君主だけが「サリーク法」³⁾を守っているこのフランスでは、国民性が、ほかの色々な権利とともに店の経営権を女性の手に渡してしまったので——女性は朝から晩まで、あらゆる階層あらゆる種類のお客を相手に商売をして、まるで袋の中でたくさんの石のかけらが絶えずふられて程よくこすり合うように、大きさがならされたり角が取れたりして丸くなめらかになるだけでなく、中に

はダイヤのような輝きを帯びてくる人もいるのだが——「御亭主」の方ときたら、そこらの足元にころがっている石ころ同然と言えるのである——

——まったくもって——世の亭主たる男性諸君よ！汝が独居するのは不善を為すことであり、汝は人とつき合い挨拶を交わすべく生れついており、女性の場合に歴然と見られるが如く、人は他人とのつき合いから改善されていくものである。

——ところで脈の具合はどうでしょうか、旦那様？と彼女が訊ねた。——案の定まったく正常ですね、わたしは彼女の眼を静かに見つめながら言った——それで彼女はお礼の言葉を何か言おうとしたが——丁度その時小僧が手袋を持って店に入って来たので——「ついでに」わたしも手袋を一つ頂きましょう、とわたしは言った。

手袋

パリ

わたしがそう言うと、その美しい女店主は立ち上って勘定場の後にまわり、手を伸ばして手袋の包みを一つおろすとそれを開いた。そこでわたしは彼女のま向いの所へ行ったが、手袋はみんな大きすぎた。その美しい女性は、一つ一つわたしの手に合わせて手袋の大きさをはかってくれたが——寸法が変わることはないわけで——彼女は、それでは一番小さいようにみえる一組をはめてみてくれ、とわたしに言って——手袋を開けて出したので——わたしはすぐにその中に手を入れてみた——これもだめですね、ちょっと首をふってわたしは言った——そうですわね、と彼女も同じような仕草をして言った。

この世の中には極めて微妙に入りくんだ表情が存在するものであるが——それは気まぐれと分別、真面目さと不真面目さがまじり合っているので、バベルのあゆゆる言葉が一度に解き放たれたにしても、とてもそういう表情を表現することは出来ないし——それは瞬時にして交わされ捕えられるので、どちらがどちらの方へ感染させたのかほとんど分らないものである。このことについて何頁かをくどくどと費すのは、文筆の士におまかせすることにして——いまは、その手袋がだめだったことを再度申し上げれば充分である。それでわた

し達はお互いに腕組みをして勘定場のそばにぼんやりと立っていたが——そこは狭くて、わたし達の間には手袋の包みをおくだけの余地しかなかった。

美しい女店主は、手袋を眺めたかと思うと窓の方を眺め、それからまた手袋に眼を移し——それからわたしを見つめた。わたしはこの沈黙を破る気にはならなかったので——彼女のする通りにして、わたしも手袋を眺め、それから窓の方を眺めて、それからまた手袋を眺め、そうしてそれから彼女を見つめ——そういう風に二人はかわるがわる続けて行ったのである。

彼女を見つめて攻撃をしかける毎に、わたしは敗北感を味うようになったが——というのは、彼女はくるくる動く黒い瞳を持っていて、長い絹のようなまつ毛を通して突きさすように見つめるので、わたしは胸の底まで見抜かれるような感じで。——これは妙な言い方かも知れないが、本当にそう感じたのであった——

別にかまいませんよ、と言って、わたしはすぐ近くにあった手袋を一つ取りあげるとそれをポケットに入れた。

この美しい女性は、値段よりも一リーブルでも余分にとっていないことが分かったのでわたしは一リーブル取ってくれればいいがと思って、どうしたらそうなるかと頭を悩ましていた——ところが彼女は、わたしが困っているのをかん違いして言った、よその国の方で——しかも要りもしない手袋をわたくしの言い値でお買いになる方から、一スウでも余計に頂けますかしら？——「そんなマン グロことが出来るとお思いになります？」——いや決して出来ないでしょうね、とわたしは言った。でもあなたが取って下さるのなら嬉しいんですが——そうしてわたしは彼女の手で金を数えながら渡し、普通店主の妻にするよりももっと丁寧にお辞儀をしてその店を出ると、小僧が包みを持ったわたしについて来た。

翻訳

パリ

わたしが通されたボックス棧敷には、おとなしいフランスの老士官だけしか坐っていません。わたしはこういう人が好きなのだが、それは、悪い人間をなおさら悪くするような軍人という職業によって、かえって立居振舞がもの静かになっ

た人物を偉いものだと思うからだけでなく、むかしこういう人物を一人知っていたからである——そして、むかしと言ったのはその人がすでに亡くなっているからだ——その軍人の名前をここに語ることで、この一頁を冒読から救うことにしよう。その人の名は陸軍大尉トバイアス・シャンデイ⁴⁾と言い——わたしの壇徒であり友人である人達の中でも最も親しい人で、彼が亡くなってからしばらく経つ現在でも、彼の人情の深さを思うと——いつも涙が溢れてくるのである。彼のような人がいるために、わたしは退役軍人というものが好きなのであるが、それでわたしは二列座席をまたいで、その老大尉のそばに腰をおろした。

老士官は、大きな眼鏡をかけてオペラの歌詞台本と思える小冊子を熱心に読んでいた。わたしが腰をおろすと、彼はすぐに眼鏡をはずして鮫革のケースにしまい、それを小冊子と一緒にポケットへ入れた。わたしは半ば立ち上ってお辞儀をした。

彼のこの動作をどこか世界の文明国の言葉に翻訳すれば——その意味は次の通りになる。「みすぼらしい外国人が棧敷に入って来たが——知っている人が一人もいないらしい。この男がパリに七年間住んでいたとしても、彼が近づく人がみな鼻に眼鏡をかけていたら、誰とも知り合いになれないだろう——眼鏡をかけていることは、この男の前に会話の戸を立てることで——彼をドイツ人以下に遇することだ。

そのフランス士官は、この言葉を口に出してはっきりと言ってくれても良かったのである。そうしていれば、わたしも勿論彼にしたお辞儀の意味をフランス語に直して、次のように言っただろう、「あなたの御配慮はよく分りましたので、心から感謝申し上げます。」

この「速記術」を会得して、度々かわる人間の表情の変化や手足の動きを、その微妙な所もあますところなく即座に平易な言葉に翻訳することほど、社交を促進する秘法はないのである。わたしはといえば、長い間の習慣でこのことをまったく機械的にやってしまうので、ロンドンの街を歩いても絶えずこの翻訳をしていて、人だかりの中で後の方に立っていたまま、話されている言葉を三語と聴かないのに二十種類もの対話を作りあげたことも一再ならずあり、

それをちゃんと紙に書いて嘘でないことを明らかにすることだって出来たであろう。

或る晩、わたしはミラノでマルチャーノの演奏会へ出かけた時のことだが、会場の戸口に丁度入ろうとした時、F…侯爵夫人がちょっとお急ぎで会場から出てこられると——わたしが彼女に気がつく前にわたしに突き当りそうになった。わたしは夫人をお通ししようとする早く傍に身をよせたが——彼女も同じようにしかも同じ方向に身をよけたので、わたし達は鉢合わせしてしまった。すると彼女はすぐによけようと反対側にとんだのだが、彼女と同様わたしも運が悪かった。というのは彼女と同じ側に身をひるがえしたので、彼女の前に立ちふさがってしまったからで——今度は二人とも反対側にとんで、それからまたもとの側に戻り——それからまた反対側へとくり返す有様——実にばかけたものだった。わたし達は二人ともひどく顔を赤らめ、それからわたしは初めにやるべきだったことを漸くやってのけた——つまり動かずにじっと立っていて、侯爵夫人はもう何の面倒もなくなったのである。わたしはせめてものお詫びとして、彼女を眼で追って廊下の端に消えるのを見守るまでは会場へ入ることは出来なかった——彼女は二度ふり返り、廊下のすこし端の方によって歩いて行ったが、それは階段を上って来て彼女とすれちがう人に道をあけている様子であった——いや、そうじゃない、とわたしは言った——これはひどい翻訳だ、侯爵夫人は、わたしに出来る限りの詫びを受ける権利があり、わたしに詫びが言えるよう道をあけているのだ——そこでわたしは走って行って、道をおゆずりしようと思っていたことを話して、さきほどの失礼を詫びた。彼女は自分もそうしようとしてあのような具合になってしまったです、と答えた——そこでわたし達はお互いにお礼を述べ合った。彼女は階段の一番上に立っていたが、近くに「介添チアシビの人」も見えなかったので、わたしは手をかして馬車にお乗せしようとして申し出て——わたし達は階段を下り、三段下りては立ち止って、演奏会とさっきの出来事を話し合った。これは本当ですが、奥様、と彼女に手をかしてわたしは言った。わたしは奥様をお通ししようとして六回も違った努力をしたんです——わたくしもあなたをお通ししようとして六回苦労したんですの、と彼女が答えたので——七回して頂ければ嬉しいんですが、とわたしは言った

——よろこんでしますとも、と彼女は言って道をあけてくれた——人生は形式にこだわるにはあまりに短かすぎるので——わたしはすぐ馬車に乗り込むと、彼女はわたしをお屋敷へ連れて行った——そしてその演奏会がどうなったかは、それをお聴きになったと思われる聖シシリヤ様⁵⁾がわたしよりよく知っておいでであろう。

この翻訳から生まれた交際が、わたしがイタリーにあって得たどの交際よりも楽しいものであったことを、一言つけ加えておきたい。

小びと

パリ

たった一人の例外をのぞいて、わたしは生れてこのかた小びとについての意見を誰からも聞いたことがないが、その例外的に意見を述べた人が誰かは、この章で明らかになるだろう。だからわたしはまったく先入観を持っていなかったもので、劇場の「平土間」^{パルテール}に眼を向けた瞬間ひどく驚いたのも無理もないことであったが——それは、こんなにも沢山の生育の悪い人達を作り出す、わけのわからぬ造化のたわむれに対してであった——むろん自然の女神は、世界中あらゆる所で時々このいたずらをしておられるが、パリでは彼女のいたずらには際限がなく——この女神は賢いのと殆んど同じくらいいたずら好きとみえる。

こういう感慨をいだいて「オペラ・コミック座」を出ると、わたしは街を歩いている人達みんなにこの考えをあてはめてみた——それは傷ましくもあてはまるのであった！特に身体がひどく小さく——顔はひどく黒ずみ——眼はきょろきょろとしていて——鼻は長く——歯は白く——あごがとがっている人の場合には——特に傷ましい思いがしたし、偶然の力によって、人間という種族から別の種族へと追い出されかかっている、こんなにも多くの悲惨な人達をまのあたり見るなんて、ここに書きとどめるのにも苦痛を覚える——しかも三人に一人が小びと！であり——中にはくる病のために、頭はひょろひょろと細く背中にはこぶが出来ている人もあり——中にはがに股になった人もあり——また自然の女神の手によって六・七才で生長をとめられた人達もあり——鉢植えの

小さいリンゴの木のように、完全に自然な状態で生まれたまままったく伸びないようになっている人達もあった。

医学研究の旅行者は、それは不当に束縛したためである、と言うかも知れないし、気難かしい旅行者は、空気の不足によるものだ、と言うかも知れない——そして好奇心の強い旅行者は、所説を固めるために彼らの家の高さを計ったり——通りの狭さを計ったり「中流階級」^{ブルジョワ}の人達が六階や七階の四・五フィート四方の部屋で食べたり寝たりしていることを計り出すかも知れない。しかしわたしは、物事に人と違った独特の観察を下すわたしの兄 シャンデイ氏⁶¹が、或る晩この事を論じて、子供というものは、ほかの動物と同じように、普通この世に生まれてくれば殆んどどんなにでも伸びることが出来るものだ、と言ったのを思い出すのである。しかし傷ましいことに、パリの市民はひどく狭い所に押し込められているので、実際に子供も生む余地もないんだ——わたしに言わせれば、何かを生むといったものぢゃないよ——何んにも生んでなどいやしない——いや、それは何んにも生まないのよりまだ悪いんだ、と彼は議論に熱が入って来て続けて言った。せっかく生んだものが、二十年も二十五年もよく面倒をみて、この上もなく滋養のあるものを食べさせたあげく、わたしの腰ぐらゐにしか生長しないんぢゃねえ。さて、こう言うシャンデイ氏自身が非常に背が低いとあっては、また何をか言わんやである。

これは理論の書ではないので、この問題の解釈はこのくらいにして、パリに小びとがいかに多いかとという意見の真実であることが、現にパリの路地のいたる所で証明させることだけで、わたしは満足しよう。わたしがカルーゼル広場からパレルワイヤル広場に至る道を歩いていると、道の真中を流れる溝のわきで途方にくれている子供をみたので、手を差しのべてその子に溝をまたがせてやった。そのあとで子供を見ようと顔をあお向かせると、彼が四十才位の大人であることに気づいた——気にしないで下さいよ。わたしが九十才になったら誰か親切な人がこれと同じことをわたしにしてくれるでしょうからね、とわたしは言った。

わたしは心にいささか道義心を持ち合わしているので、世の中にあつてまともに行って行く大きさも力もないような、気の毒にも生長をとめられた人達に

対しては、親切でありたいと思うのである——そういう人達の一人が踏みつけられるのを見るには堪えられない。さて、わたしが例の老士官の横に腰をおろしたかと思うと、わたし達の坐っている棧敷の下でそういうことが起っているのを見て、たちまちやり切れなさがこみ上げて来た。

一階正面の特等席の端の所に、その席と横の一等棧敷との間に狭い通路があって、ここは劇場が満員の時には、あらゆる階級の人達が入り込む所なのである。平土間と同じように立って見なければならぬが、料金は正面の特等席と同じである。どうしたわけか、この種の哀れな人が一人、この割の悪い場所に押し込まれていたが——その晩は陽気が暑く、その上彼は自分より二フィート半も背の高い人達に囲まれていた。彼はまわりから言い表わしようのない程苦痛を受けていたが、しかし彼を最も苦しめていた者は、七フィート近くもあろうかというのっぽの肥満したドイツ人で、その男は彼の前に立ちはだかっていたので、彼には舞台も俳優もさっぱり見えないのであった。その哀れな人は、ドイツ人の腕と身体の間のこととした隙間を探そうと右側左側とためしてみても、一目なりとも舞台の模様を見ようと懸命であったが、そのドイツ人は考えられないような不親切な態度でござんと直立していた——その小さい人は、まるでパリで一番深い堀井戸の底におかれたのも同然であった。そこで彼は丁重にドイツ人の袖に手を伸ばし、自分の苦しみを述べたのだが——そのドイツ人は、頭をふり向けるとまるで巨人ゴリアテがダビデに対してしたように——彼を見おろしてから——ひややかに元の姿勢をとり直した。

わたしは丁度その時、さきの修道僧から貰った小さいかぎ煙草入れから煙草を一つまみ取り出しているところであった——なつかしい老僧よ！何事も忍び堪える！修練を積んだあなたの優しい思いやりのある心だったら——この哀れな者の苦しみに優しく耳を傾けて下さっただろうに。

その老士官は、わたしがこの呼びかけをして思いをこめて眼を見張ったのを見てとると、どうしたのですか、と遠慮なくわたしに訊ねた——それでわたしは簡単に事の次第を話して、なんてむごいことなんでしょう、とつけ加えて言った。

この時には、その小さい人はとことんまで追い込まれて、一般の人なら誰で

もとり乱すような激しい怒りにからられて、そのドイツ人の長い髪をナイフで切り落してやると叫んだ。——するとそのドイツ人は、ひややかに振り返って、手が届くものならやってみな、と答えた。

弱い者いじめが侮辱によって強められれば、それが誰に対してなされたものであっても、人情ある人なら誰でもその人の味方になるものである。わたしはその不正を正すために思わず棧敷から飛び出したくなった——ところがその時、老士官は騒ぐことなく問題を片付けたのであった。つまり一寸身体を前にのり出して劇場の番兵に合図を送り、同時に指でそのもめ事を示すと——番兵はその方へと進んで行った——まったく被害を話す必要などなく——事情は一見して明らかであった。そこで、番兵はすぐに銃でドイツ人を押し戻すと、小さい人の手を取りドイツ人の前に連れ出した——わたしは思わず手をたたいて叫んだ、すばらしいですねえ——しかし、英国では、こういう風に武力で解決することは許されんでしょ、とその老士官は言った。

——英国では「みんな楽に坐れるんですよ」とわたしは答えた。

老士官は、わたしがまだ気が立っていればそれを静めてやろうと思ってか——これは「^ポまい^ン文^モ句」ですな、と言った——そうしてこの「^ポまい^ン文^モ句」というのは、パリでは常に何か賞品に値するので、彼はわたしに一つまみのかぎ煙草をすすめてくれたのである。

ばら

パリ

一体どうしたんですか、今度はわたしがその老士官に訊ねる番だった。というのは「^{オゼ}坊^{レマン}さん、^{ムツシュ}手を^{ラベ}あげろ」という大きな声が平土間のあちこちから響きわたって、さきにわたしが修道僧に呼びかけた言葉が老士官に分らなかったように、その意味がわたしに皆目分らなかったからである。

それは上の棧敷席にいる誰かみじめな坊さんのことであって、オペラを見ようとして二人の婦人の後^{グリゼット}にそっと立っていたのだらう、と老士官は語ってくれた。そして平土間の人達はその坊さんを見とがめて、上演中は両手をあげているようにせまっているのだというこであった——でも坊さんともあろう者が婦

人にスリを働こうなんて考えられませんか、とわたしは言った。すると老士官はにっこり笑って、わたしの思いもよらない知識を耳うちしてくれたのである——そんなばかな！わたしはびっくりして青くなるのを覚えながら言った——洗練された感情を持つフランスの国民が、同時にそんな汚れきった、似つかわしくないものだなんて信じられません——「^{ケル} ^{グロシエルテ}なんてひどいことを！」とわたしはけつ加えて言った。

老士官の話によれば、それは「タルチエフ」がモリエールによって書かれ上演された頃、劇場で始まった教会への下品なあてこすりであるが——中世紀的風習でほかに残っているものと同様、いまはすたりかけているものなのであった——彼は続けて言った、あらゆる国民は、洗練されたところと「^{グロシエルテ}下劣なところ」とを持っていて、その二つがお互いに優ったり劣ったりするものです——わたしは大抵の国へは行ったことがあります、どんな国でもほかの国にみられないような洗練されたところをいくつか持っているものです。「^{ルブール} ^{エル} ^{コトル}長所と短所 ^{ストル} ^{ヴァン} ^{タン} ^{シャーク} ^{ナシオン}があらゆる国民に具っているものです。」そしてどの国民にもこの二つの均衡が保たれています。ですから、このことをわきまえていることだけが、世界の半分が他の半分に対して持っている偏見を解消することが出来るのです——それから旅の良い点は色々あるでしょうが、「^{サヴォール} ^{ヴィーヴル}行儀作法」について言えば、人間と習慣との両方がよく見られることで、それは人間同志がお互いに許し合うことをわたし達に教えてくれるのです。そうして彼はわたしに会釈をして次のように決論づけた、お互いに許し合うことは、お互いに愛し合うことを教えてくれるのです。

その老士官は、彼の性格に対するわたしの好ましい第一印象とまったく違わない卒直さと良識を持った態度で、この話をしてくれたのだが——わたしはこの人が好きだと思った。しかしわたしは愛情の対象を間違えたのかも知れないのである——わたしが好きになったのは、彼の意見と同じだったわたし自身の意見で——ただ違うのは、わたしは彼の半分もうまく意見を表現することが出来ないということであった。

もし馬が旅の途中で、見たことのないものに出会うとなんにでも耳をそばだて、始終びっくりしているなら——それは馬に乗っている人にも馬自身にも面

倒なことだろう——だがわたしは、世の誰よりもこの種の悩みにわずらわされることは少いのである。といっても正直な話、パリに着いて一ヶ月は、わたしも多く、事に心わずらい多くの言葉に顔を赤らめたもので——二ヶ月目になって、そういう言葉が別に気にする必要のない、まったく罪のないものであることが分った。

ランブリエ夫人は、わたしがお近づきになってから六週間たった頃、パリから十キロばかり馬車の遠乗りにわたしを招いて下さった——あらゆる女性の中でランブリエ夫人は最も行儀の正しいお方で、この人以上に心が気高く清らかな女性を見たいと願わないほどである——帰路についた時、夫人はわたしに馬車をとめる合図をしてほしいとおっしゃったので——なにか御用ですか、とわたしは訊ねた——すると夫人は「^{リアン クビセ}ちょっとお小用をたしたいので」とお答えになった。

礼儀正しい旅行者よ、ランブリエ夫人にこのままおしっこさせることを嘆かないで下さい——そうして美しく妙なる女神達よ！めいめい「ばらを摘みに」お出かけなり、道々その花をまいていらっしやい——ランブリエ夫人はただそれだけのことをなさっていたのですから——わたしは夫人に手を貸して馬車から下ろしてあげたが、もしわたしが清らかな「カスターリア」の泉⁷⁾に奉仕する僧であったとしても、この時以上にうやうやしい態度でお任せすることは出来なかったであろう。(続く)

「第一巻終り」

註

- 1) 手紙、手紙の原文はフランス語であるが、原文を省略して大意を訳した。
- 2) ユージュニアス スターンの大学時代からの親友 John Hall-Stevenson (1718-85)のこと。 *Tristram Shandy* の中にも登場して、Yorick の死をみとろうとしている。
- 3) サリーク法 原文 “salique” the Salic law のことで、元サリーク・フランク族の法律。王位と土地相続から女性を除外するもの。
- 4) トバイアス・シャンデイ *Tristram Shandy* に登場する、心優しい退役軍人 uncle Toby のこと。スターンの父の性格がかなり投影されていると言われている。
- 5) 聖シンリア様 A. D. 230 年頃ローマで殉教した聖女。初めてオルガンを作ったと

伝えられ、音楽の守神とされる。

- 6) 兄シヤンデイ やはり *Tristram Shandy* に登場する人物で、トリストラムの父 **Walter Shandy** のこと。哲学的探究癖を持った一種ユーモラスな人物。
- 7) 「カスタリア」の泉 ギリシヤはパルナッススの山腹にある聖泉で、アポロと九人のミューズの座と言い伝えられている。